

## 「-らしい」の連体用法に関する考察

### On the Adnominal Usage of “-rashii”

岩崎 真梨子  
Mariko IWASAKI

#### 1. はじめに

「-らしい」は、「可愛らしい」「子供らしい」のような形容詞性接辞としての用法と、「昨夜、雨が降ったらしい」のような推量を表すモダリティとしての用法を有する。モダリティ用法の「-らしい」が、形容詞性接辞の「-らしい」から派生したものであろうことは、既に先行研究でも指摘されている。

本稿では、「-らしい」のモダリティ用法の成立において、次のような連体用法の例が見られることに着目する。

- (1) a テレビでは、強張った表情の被害者の妻らしい女が映し出されていた。洗いざらしたTシャツにジーンズという質素な服装で髪をひつつめ、ほとんど化粧もしていない。

(桐野夏生『OUT』1997〈平成9〉)

- b (真野です。菅野らしき男を発見。古着屋の前にはいます。黒のニット帽、サングラス、服は灰色) 真野の声が聞こえた。

(東野圭吾『さまよう刃』2004〈平成16〉)

これらの例では、「テレビに映し出された女は、被害者の妻に見える」「古着屋の前にいる男は菅野に見える」ことが表されているのではないと思われる。また、何れの例でも「ある話者からYがXに見える」ことが表されており、XとYが同定の関係にあると考えられる。この類は、(1) bのように、「-らしき」の形を取るものが見られるのも特徴の1つである\*1。

こういった「-らしき」の意味用法について、田野村(1991)や三宅(2006)では現代語の例が指摘されている。また、湯沢(1954)において近世の例が挙げられている点には特に注意される。新しいものとしては、山本(2010)が近世以降の「-らしい」について詳しく述べられている。

本稿の目的は、(1)のような推量的判断を表す「-らしい」の意味・用法について検討し、形容詞接辞の用法とモダリティ用法の関連がどのように示されるかを明らかにすることにある。

#### 2. 先行研究

- (1)のような例は、田野村(1991)・三宅(2006)において、助動詞あるいはモダリティとしての

\*1 以下、本稿で連体形「-らしい」とする場合は、「-らしき」の形も含めることとする。

意味・用法を有するとされる。田野村（1991）では、以下の通り述べられている。

第三<sup>\*2</sup>に、助動詞の「らしい」が連体修飾に用いられるときには、次のように「らしき」という形も使われる。

(28) いまでも山らしき姿はみえないが、この上り勾配は明らかにウラル峠（？）だ。

(アジア・ヨーロッパ)

(29) 海岸は泥の広場。巨大な原木があちこちに積み上げてある。その奥には自動車修理工場らしき建物があり、トラクター類が何台も無造作に置かれていた。

(メラネシア)

他方、接尾語の「らしい」を「らしき」という形にした例は見られなかった。

同様のことは、三宅（2006）でも述べられている。三宅氏は、「-らしい」を「ラシイに前接する名詞が持つ典型的な属性」を表す「典型的属性表示」と「命題が真であるための証拠が存在すると認識する」ことを表す「実証的判断」に分類し、次の通り記述されている。

「らしき」の形をとって連体修飾する場合は、この「典型的属性表示」にはなり得ず、専ら「実証的判断」になる。

(36) 新たに新聞社に、犯人らしき人物から手紙が届いた。

(37) 埼玉県秩父市で五十万年前の建物跡らしき穴が発見された。

「典型的属性表示」と「実証的判断」は、名詞に直接、後接した場合、どちらの用法かが確定出来ず、あいまいになることも多い。次例のようなものを参照されたい。

(38) 帰り際、新人らしい看護師が一所懸命掃除をしていました。

\*2 田野村（1991）では、接辞の「-らしい」と助動詞の「らしい」の区別を、以上に挙げた第三を含め、四点に分けて論じられている。以下、第一・第二・第四に関する記述を引用する。

第一に、動詞や形容詞などにも自由に付き得る助動詞の「らしい」とは異なり、接尾語の「らしい」はほとんど専ら名詞に付く。

第二に、接尾語の「らしい」を含む「あの男は実に男らしい」の音調は、通常、「～オ「トコラシイ」のようになる。これに対し、助動詞の「らしい」を含む「向こうからやって来るのはどうも男らしい」では、「～オ「トコラ「シイ」という発音が基本的だと思われる。

[略]

第四に、接尾語の「らしい」では、「XらしいX」という言い方が可能である。

(30) 何はともあれ、最初の洞窟らしい洞窟だ。

(メラネシア)

(31) 山系、次第に近づいてくる。アップ・ダウン烈しい丘陵地帯に入る。殆ど道らしい道はない。

(西域(上))

これに対し、助動詞の「らしい」がこのような形で用いられることはない。これは、「Xであると推量されるX」という表現内容の不合理さによるものとして理解することができる。

(39) 最寄りの地下鉄駅に降りると芝居見物らしい人の波が国立文楽劇場の方に続いている。

(40) 若い学生と一緒に、カウンターでコーヒーを飲む教授らしい老人を見た。

これは、両者が全く異質なものではないということを示している。

以上の通り、両氏によって連体形の「-らしい」、また特に「-らしき」という形において推量の意味を表す例が見られることが指摘されている。

では、モダリティを表す連体用法の例はいつ頃から見られるのか。湯沢 (1954) において、推量を表す「-らしい」が近世より見られるとされるが、そのなかに連体形の例も挙げられている (囲み線は岩崎による)<sup>\*3</sup>。

「らしい」は体言に附いて、推量する意味を表わすに用いられる。

○ソリヤほんとうにかへ、どふもうそらしいよ (集成二、五二二)

○是もまづ破談ばならしいノ (八笑人、三下、八オ)

○今のはどふも米八さんらしいヨ (梅暦、六、一七ウ)

○向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらってゐるから…… (膝栗毛、五下)

○どうやら実説らしくもあり、誕らしい所もあるてナ (風呂、四上)

○そんな物らしかったが…… (集成一、二七三)

これがまた副詞に附くことがある。

○ム、そふ〔然〕らしいよ (徳五、八二)

以上の諸例は、「——である」と断定しないで、「——であるようだ」と推量する意味に用いられているので、推量の助動詞と見るべきものと思う。

「かの年増らしいやつ」は、「なにかあらっている」ある人物に対し、その特徴などから「年増に見える」ことが示されていると考えられる。「誕らしい所」は、ある話に対して、「(本当のようにも聞こえるし)嘘のようにも聞こえる」ことが示されていると考えられる。いずれも、「そう見える」「そう聞こえる」といったことが示されている点で、推量的判断を表しているのではないと思われる。こういった例は挙げられてはいるが、「どふもそらしいよ」のような終止用法でモダリティを表す例との関連を通時的に検討しているものは見受けられない。本稿ではこの関連について検討し、「かの年増らしいやつ」のような連体用法において先ず推量的判断が表されるようになり、その後、終止用法でモダリティを表すようになるとするのが目的である。

\*3 集成二、五二二……「起承転合」(享和二 十返舎一九) 集成一、二七三……「不酔照明房情記」(年代著者不詳) 徳五、八二……「南閩雑話」(安永二 夢中山人)による。

(湯沢 (1954) pp.734-735参照)

山本(2010)は、近世以降の「-らしい」を調査し、形態・統語・意味的観点からモダリティ形式の成立について検討されている。そのなかで、近世において〈「~らしき」「~らしい者」で人・物を表すやや定型化した表現〉が見られるとされており、次の例を挙げられている。

- (8) a. 又年比三十計なる [呉服屋の手代] らしきが、 (嘶本・二休咄：貞享5(1688)年刊)  
b. [知行から此比取られた] らしき中間が封じ文出して、此上書一つお目かりましよと云へば (浮世草子・好色盛衰記・五ノ四：貞享5(1688)年：湯沢1936)  
c. 「ハテ マア 誰ぞ [呑み込んだ] らしい者があるなら マア それに任せてどうぞそこらへ」ト 隠れい といふ仕方 ※「呑みこむ」事情が分かっている(人)  
(歌舞伎・菊水由来染：寛保3(1743)年初演)

山本(2010)はこれらを「-らしい」の上接部分が形態的に変化(句へ拡張)したものと位置付けられており、モダリティ用法には含まれていない。しかし、「定型化した表現」において句への拡張が起り、その後、終止用法のモダリティの例が見られるという点に疑問が残る。近世において、

- まづきせるの湯に成るほどたばこけふらせ、賄らしき男とらへて、芝居のぬれ狂言のうまき所を咄しかけ、 (八文字自笑「野白内証鑑」3巻 1710〈宝永7〉)  
○ 十八九にて美しい妾のよふな者立出、ハア、梨子が落たハと拾ひあげた処へ、旦那らしき人も立出しが、 (随本舎梅山「臍が茶」1797〈寛政9〉)  
のような上接部が句になっていない場合でも、「Xに見える」(賄に見える男・旦那に見える人)意味は表されと思われる。

また、日本語記述文法学会(2008)では、モダリティ表現が名詞修飾節に現れるとしており、「-らしい」について以下のように述べられている。

観察や推定を表す「らしい」は、「ようだ」「みたいだ」に比べて現れやすいようである。「らしい」は、「らしき」という形をとることもある。

- ・ 指名手配中の犯人らしい／らしき男を町で見かけた。
- ・ その学生は、友人から借りたらしいノートを試験に持ち込んだ。 (p.62)

「指名手配中の犯人らしい／らしき男」といった例を推量とする指摘もある。連体形で既にモダリティ化しているとするべきではないかと思われる。

以上の先行研究より、(1)のような連体形の「-らしい」が見られるようになったのは、近世以降であると考えられる。また、現代語では、特に「-らしき」の形で推量の意を表すとされている。現代語ならびに近世において、推量的判断を表す連体用法は既に指摘されているが、通時的な検討については考察の余地があるのではないかと思われる。本稿では、近世の「-らしい」の意味・用法、特に連体用法を中心に、「-らしい」の形容詞用法とモダリティ用法の関連について検討する。

### 3. 調査資料・用例数

以下の通りである（先行研究から引用したものは省く。『新潮文庫の100冊』『明治の文豪』『大正の文豪』については、任意で作品を選出）。

〔中世〕抄物資料『日葡辞書』『史記抄』『中華若木詩抄』『湯山聯句抄』『玉塵抄』キリシタン資料『エソポのハブラス』辞典『日本国語大辞典 第二版』『時代別国語大辞典 室町時代編』

〔近世〕『嘶本大系』『浮世草子集』『假名草子集成』『黄表紙 川柳 狂歌』『洒落本 滑稽本 人情本』『井原西鶴③』『近松門左衛門集①』『近松門左衛門集③』『上方歌舞伎集』『江戸歌舞伎集』『廓の大帳』上『洒落本大成』1-3『春色梅児誉美』『春色辰巳園』『浮世風呂』『浮世床 四十八癖』『東海道中膝栗毛』『花暦八笑人 滑稽和合人 妙竹林話七偏人』『近松全集』1巻

〔明治〕『新潮文庫の100冊』『明治の文豪』『大正の文豪』『太陽コーパス』

〔大正〕『新潮文庫の100冊』『明治の文豪』『大正の文豪』『太陽コーパス』

〔昭和〕『新潮文庫の100冊』『大正の文豪』『昭和文学全集』13巻『海野十三全集』1巻『昭和文学全集』赤川次郎『ヴァージン・ロード』（1983）

〔平成〕吉本ばなな『キッチン』（1991）『満月』（1991）,桐野夏生『OUT』（1997）,舞城王太郎『阿修羅ガール』（2003）,川上弘美『センセイの鞆』（2004）,東野圭吾『さまよう刃』（2004）,伊坂幸太郎『アヒルと鴨のコインロッカー』（2006）,恩田陸『ネバーランド』（2000）『夜のピクニック』（2006）,有川浩『図書館戦争』（2006）『図書館革命』（2007）,角田光代『八日目の蟬』（2008）,桜庭一樹『GOSICK VII』（2011）  
「産経新聞」（1997）,「毎日新聞」（1997）

ただし、中世は、抄物資料『中華若木詩抄』『湯山聯句抄』、キリシタン資料『エソポのハブラス』には用例が見られなかった。

近世は、上方・江戸で意味用法に大きな差はないと思われるため、特に区別はしない。資料のジャンルや作者によって異なるようである。

明治期・大正期・昭和期は、各年代の用例が得られるよう調査している。用例の大部分を占める『新潮文庫の100冊』では、昭和初期から中期（戦前・戦時中）の作品が少なく、用例が得られないため、『昭和文学全集』などで補う。

上述によって採取した用例数は以下の通り。

中世	近世	明治	大正	昭和	平成
70	858	2346	2535	5235	1048

#### 4. 「-らしい」の活用形

まず、「-らしい」の活用形を通時的に確認する\*4。

##### 【中世】

「-らしい」が見られるようになるのは中世以降である。これについては、村上（1981）に詳しい。初出例は（2）の『沙石集』の例であり、連用形を取る。

##### 〔連用形〕

（2） 或ル乳母、姫君ヲ養ヒテ、余リニホメントテ、童ワガ養姫ハ、御美目ノウツクシク、御目ハ細／＼トシテ愛ラシクオワシマス〔ゾ〕ヤトイフヲ……（巻一 86・6）[村上1981]

「愛らしい」は、上接名詞それ自体の意味と「-らしい」が後接した形容詞の意味が異なり、「Xらしい」で一語の形容詞としての意味を表していると考えられる。この場合、敢えて「-らしい」の意味を記述するならば、「そういう感じがする／強い」ことを表していると思われる。

（3） a 又惠帝ハ、正シク高祖ノ嫡子テ、父ノ位ヲ繼テ、天子ノ位ニ即タレトモ、高后ノアマリツヘラシウテ、妬忌ノアマリニ戚夫人ヲ、手足ヲ、ノロシ、目ヲ抉リ、鼻ヲ熏ヘテ、厠ニ置カレタヲ見テ、アマリノ、アサマシサニ、其カラ天下ノ事ヲモ、マメニモ不思シテ、何事ヲモ、呂后ニウチマカセテ、我ハ不知シテ、イラレタソ。（史記 三 85・2 ウ）

b 処父カ至テ忠アリテ、国滅君死テ、臣節ヲ不忘ホトニ、天カ石棺ヲ賜テ、氏族ヲ光華ニスルト云ハ、事カ實ラシウモナイソ。（史 四 251・4）[村上1981]

（3） a 「つべらしい」は「むごたらしい、残酷である」意を表す。「つべたまし」や「つべつべし」に同じと考えられる。

##### 〔連体形〕

（4） a 上ニ先ツツヨウ、ウラメシサウニ、云テ置テ、次ニ呂后ノ性カコワウテ、女ノ様ニモナイソ。カウテ毒ラシイ人ナルコトヲ、云タカ、文勢ノ面白處ソ。

（史七 173・1）[村上1981]

b カ、ル時分ニ人ラシイ人カアラハ、秦ニ天下ヲ取ラレマイモノヲソ

（史 四 355・14）[村上1981]

c 言行ニ尤悔カスクナケレハ、自然ト、禄カ其中ニアルテコソアレ、始カラ禄ヲ干メハ、ナニカ、ハカラシイ事ハアラウソ

（史 一一 124・6）[村上1981]

d 適婉トハ筆勢ノツヨイヲ云タソ、ツヨイト云テ、鬼々神ノヤウニテアイソモナイソ、美人ノウツクシウ、アイソラシイヤウナ事カ中ニマシツテアルソ

（玉 三五 489・12）[村上1981]

\*4 接辞「さ」「み」が後接して名詞化したものや、語幹のみで用いられて「-らしげ」のように形容動詞化したものなどについては、今回は考察対象から省く。

(4) c 「はからしい」は、「期待されるだけの効果があるさま」を表す。「はか」は「はかどる」などの「はか」と同様に、「事の進捗」を表すと考えられる。いずれも「Xらしい」で一つの意味を表している。

[終止形]

(5) 鳥ノ身アリテ人ノ言アリ……全体ハ鳥テ、モノヲ云ハ、人ノ様ナハ、アマリハケラシイ  
(史 四 248・16) [村上1981]

「ばけ [化け] らしい」は「化け物じみている、奇妙である」意を表す。

以上の通り、中世の「-らしい」は、上接部が体言かそれに準ずるものであるが、意味としては接辞と切り離せるものではなく、一語の形容詞として用いられているものと考えられる。

### 【近世前期】

続いて近世の例を確認する。

[連用形]

(6) a 京にてある武士と見えたが、人らしく馬にのりとをるに、坪の内より鞆をけいだしたれハ、中間肝をつぶし、餓鬼<sup>がつき</sup>め、覚えたるそといふまゝ、鎧をなおしつかんとしけり。

(安楽庵策伝「醒睡笑」5巻 1623 (元和9))

b 一かど御褒美に預らんと。乗物を白洲にすへさせ広言らしく言上す。

(近松門左衛門「佐々木先陣」1686 (貞享3))

c 座敷に灯かかやかさせ、娘を付け置き、「露路の戸の鳴る時しらせ」と申し置きしに、この娘しをらしくかしまり、灯心を一筋にして、

(井原西鶴「日本永代蔵」2巻 1688 (貞享5))

(6) abからも明らかな通り、「人」や「広言」など、上接部が意味として切り出せるものも含まれるようになる。これは、近世における「-らしい」が、中世に比べて比較的自由に上接部を取るようになったことに関連するものと思われる。上接部の意味が切り出せる場合は、「Xの感じが強い」のような意味を表している。(6) cについては中世の例と同じく「Xらしい」で一つの意味を表していると考えられる。

[連体形]

(7) a 仁物らしき男、枘の前後にたいを入になひ、たいはたいハとうりけるを、ある家のぬしよびいれて、

(安楽庵策伝「醒睡笑」1巻 1623 (元和9))

b さらに其時のゑにより、いふてしほらしき句ををしへ申さん

(安楽庵策伝「醒睡笑」6巻 1623 (元和9))

連用形に同様、(7) aのような上接部が意味として切り出せるものと、(7) bのような切り出せないものに分かれる。ただし、(7) aについても、上接名詞の表す意味と、「-らしい」の上接名

詞としての意味は異なる。「じんぶつ」は、「-らしい」がつくとただの「人（人間）」ではなく、「素晴らしい、立派な人」という意味を表す。

【近世中期以降】

[連体形]

1600年代の終わり頃になると、上接部が意味として切り出せ、且つこれまでの「Xの感じが強い」というのとは異なる例が見られるようになる。

- (8) とつとぬけたる男聞て、目薬が吉岑に沢山にござるかといふ。一山の内にハどこにもござるといふ。をれもとりに行ませうといひしが、あくる晩にきたりて、けふよしミねへ行て尋たが、目薬らしい物ハなかつたといふ。どうしやつたといへば、木のねにあらうと思ひ、ほりかへしてミましたといふた。  
(作者未詳「当世手打笑」1681〈延宝9〉)

ここでは、上接名詞である「目薬」そのものを含め、それと取れるものを指している。ここでの「-らしい」は、「Xと捉えられるもの(Y)」を表しているのではないかと考えられる。

(8) のような例が見られるようになった後、推量を表す連体形の例が見られるようになる。以下の例を見られたい。

- (9) 又年比三十計なる呉服屋の手代らしきが、さらしの衣唐木綿の香の図の紋つづじたるが、かすかに見えすきておかし。  
(編者未詳「二休咄」1688〈貞享5〉)

この例では、作品に新しく登場した人物について述べており、「呉服屋の手代らしき」によって、その人物が「呉服屋の手代に見える人物」であることを表していると思われる。このとき、「XらしいY」は、「YはXに見える」というようにXとYを同定関係で示すことが可能である。

「Xに見える」ことを表す例では、(話者の)主観が表されていると思われる。この(話者の)主観を表す点で、連体用法の「-らしい」はモダリティ化していると考えられる。

[終止形]

終止形についても、これまでに見てきた活用形と同様、一語の形容詞と捉えられるものと、上接部の意味が切り出せるものが見られる。

- (10) a あるへいモシ、豚肉ハたべませんとサ。鴨や白魚をたべますとさ こりんヲヤ、こわらしい  
(振鷲亭主人「振鷲亭嘶日記」1626〈寛永3〉)

- b 雄次郎 何じやいな、いやらしい。年端も行かいで、あたしつこい。

(桜田治助「御撰勸進帳 第一番目三建目」1773〈安永2〉)

- (11) え、榮耀らしい。かく牢人の憂き身といひ、殊更敵を持つたる身が、せめて一年に一度の便りをもし給はず。  
(近松門左衛「出世景清」1685〈貞享2〉)

(10) は上接部が意味として切り出しにくい、一語の形容詞と考えられるものである。(11) は、上接部の意味は切り出せるが「-らしい」がつくことによって「Xの感じが強い」ことが表される。なお、文語の「らし」の形も見られるが、意味・用法は(10)に同様と思われる([ ]内は岩崎によ



る補足)。

(12) a 心にくゝもかはひらし。うきがなかにも。思ひ出は。せめてのかひよつたへきく。

(近松門左衛門「主馬判官盛久」1686〈貞享3〉)

b 文七(政右)ても[さても]古ひ奴の。

久(小柴)ヲ、憎体らし。(初代奈河亀助「伊賀越乗掛合羽 七ツ目」1776〈安永5〉)

以上の通り、1600年代から1700年代にかけては、終止形「-らしい」は形容詞として用いられている。

これに対し、1800年代では、次のような終止形のモダリティ用法の例が見られるようになる。

(13) a てい「サアぶくあがらんせ。いつたいおまいは、どこを尋ねさんすのじやいな。参宮じやあるが、おひとりか。但しは、おつれでもおますかいな 弥次「さやうさ。道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんなこまつたこたアございやせん てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、今おひとりは、京のお人で、目のうへに、此くらひな、痰癩のあるおかたじやおませんかいな

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編追加 1806〈文化3〉)

b 目のふちへ紅を付るのも一体は役者から出た事らしいネ

(式亭三馬『浮世風呂』3編 1811〈文化8〉)

c よね「ヲヤ丹さんまだ宅へおかへりでないか。今に梅次さんと一所にかへるから、ちつと待てお出ヨト、いひながら完尔笑ひ、酒乱の客のともして多寡橋の、方へ過行後かげ、丹はびつくりお長はかけ出し 長「ヲヤ米八さんじやアありませんか 丹「ナニ／＼米八ではねヘト、口にはいへど心にギツクリ。今米八が其近處から、かへり來らば大変と、思へば何かそは／＼して「サアもふよかア飯らふの 長「ア、かへるがネ。今のはどふも米八さんらしいヨ。かくさずといゝじやアありませんかト

(為永春水『春色梅児誉美』初編3 1833〈天保4〉)

これらの例では、話者がある根拠に基づいて「[AはXである]らしい」のように推量している。[A=X]は話者にとって真偽不明であり、「-らしい」によってそうである可能性があることが示されている。ただし、(13) aは「いかにもお江戸らしい人だが」と取ることも可能であり、やや判断の難しい例である。これに対し、(13) bは「(目のふちへ紅を付るのは) 役者から出た事である」、(13) cは「(さっき見えたのは) 米八さんである」と話者が判断しているため、推量の例と考えるとよいと思われる。特に、(13) cは推量用法の「-らしい」が共起し易い副詞「どうも」を伴っており、推量用法の例とみてよいと考えられる。判断の根拠は話者が見聞きしたことや、人の様子・言動であり、(その場の)知覚に基づくものである。1800年代に至って、「-らしい」は推量(助動詞)用法を獲得したと考えられる。

ただし、近世において、終止用法で推量を表す例は少なく、今回調査した資料では7例(全858例中)

である。一方、連体用法で推量的判断を表す例は21例見られる。

なお、近世では、已然形の例も見られる。

[已然形]

- (14) a 只何となくあなたさまの心ざしにほだされて、一日あはねば千年へだつるものおもひ、せめてまぎるゝかたもやと、硯にむかへばゆかしとのみ、筆にかゝる辛気さの、我が身ながらも野父らしや。いやらしけれど動もなりませぬ」と、なみだぐまるれば、此のうへは異見する人もなし。 (夜食時分「好色敗毒」2巻 1702〈元禄15〉)
- b あるじ夫婦がはたらきがぬるいなどと、むたいな事を仰せられて、おいぢりなさるゝ旦那がござりまして、あげやの物が年をよらす事でござります。かう申せばつやらしけれど、御器量ようてお気がすいで、客やの為になる事なら、おなぐさみがかけうがおいとひなされぬ、 (八文字自笑「野白内証鑑」1巻 1710〈宝永7〉)

已然形は、現代語では用例は見られない。

## 5. 推量を表す連体形「-らしい」

以上の通り、「-らしい」の活用形を通時的に確認すると、近世において、連体用法で推量的判断を表す例が見られるようになる。この連体用法では、「XらしいY」で、「YはXに見える」というように、XとYを同定関係で示すことが可能である。その後、終止用法において「[AはXである]らしい」のようなモダリティの例が見られるようになる。ここでは、近世の例を中心に、推量的判断を表す連体形の例がどのようにして見られるか検討する。

### 5-1. 近世における「-らしい」連体用法

近世における連体形「-らしい」の意味・用法は、主に「そういう感じがする」「Xの感じが強い」ことを表す形容詞性接辞の用法と、「Xに見える／聞こえる／捉えられる」ことを表すモダリティ用法とに分かれる。1600年代の前半では形容詞性接辞の例のみが見られる。

#### 【形容詞性接辞】

「-らしい」は主に名詞を承接する。このとき、意味上の観点から、上接名詞を切り出せない場合は、形容詞性接辞の「-らしい」と解される。

- (15) a さらハ其時のゑにより、いふてしほらしき句ををしへ申さん  
(安楽庵策伝「醒睡笑」6巻 1623〈元和9〉)
- b 又ざは／＼と悪口を云て、嫌らしい男じやと思へ共、甘も逢ふて、先には誠の心で誓紙を取。  
(作者未詳「けいせい朝間嶽」上 1698〈元禄11〉)

「しお」や「いや」は、上接名詞それ自体の意味と「-らしい」が後接した形容詞の意味が異なり、「Xらしい」で一語の形容詞としての意味を表すものと考えられる。また、形容詞語幹や形容動詞語幹を

承ける場合も、上接部の意味を切り出すことはできず、「-らしい」は形容詞性接辞であると考えられる。

(16) a 千年も万年も、藤様との御仲さめぬやうに遊ばせ。そのいとらしいお気だてでは、さめまい／＼。  
(近松門左衛門「淀鯉出世滝徳」1708〈宝永5〉)

b ちくヲ、かはらしい盃じやな はるアイせんと梅枝さんにもろふたわいな  
(斗樽堂主人「新月花余情」1757〈宝暦7〉)

(17) a 殊勝らしい坊様が、鉦をはつて、お念仏。  
(近松門左衛門「薩摩歌」1704〈宝永1〉)

b 心中の間夫狂ひのといふやうな、気ほねもおれず、式十文で、式十文が情をかくれば、くぜつといふやうな、やほらしいさともなし、  
(軽口耳菰「口拍子」1773〈安永2〉)

形容詞語幹・形容動詞語幹を承ける場合は、「-らしい」がつくことによって、本来の「いとしい」「かわいい」などに対し、「～といった感じである」という意味になると思われる。上接部はそれ自体で意味を成すものではないと思われる。

ただし、近世の「-らしい」は名詞、形容詞語幹や形容動詞語幹のように幅広く上接部を承けることが可能であり、形容動詞語幹や名詞を承ける「-らしい」のなかには、上接部の意味は切り出せるが、「Xらしい」で一つの形容詞として用いられているものもある。以下、名詞接続の例を挙げる。

(18) a 宿に帰ってこの事を語れば、内儀は後悔らしき顔つき、おやぢはこれを笑うて、  
(井原西鶴「世間胸算用」1巻 1692〈元禄5〉)

b 護国寺の音羽町、権現の門前町はすこしわけらしきゆきかた、料理もさのみふつ、かならず、絹の物など肌付に着て、<sup>きびす</sup>跟にあかゞりもなく、男の腰をすりむく事もなく、しばらくは酒ものまるゝ所也。  
(八文字自笑「野白内証鑑」5巻 1710〈宝永7〉)

これらの例における「後悔」や「わけ」は、「-らしい」を承ける前と「-らしい」で一つの形容詞として用いられる際とで、大きく意味が異なるわけではなく、上接名詞の意味をそのまま保っている例であると考えられる。しかし、「-らしい」が後接した場合の意味として「Xの感じがする／強い」ことを表し、形容詞と解される。また、この場合の上接名詞Xは、「後悔しているらしい顔つき」「わけがあるらしいゆきかた」というように、人の状態を表している。

次の例も、上接名詞Xの意味は切り出せるが、「Xらしい」で見ると形容詞であると考えられる。

(19) a 仁物らしき男、杓の前後にたいを入になひ、たいはたいハとうりけるを、ある家のぬしよびいれて、  
(安楽庵策伝「醒睡笑」1巻 1623〈元和9〉)【再掲】

b 「をの子ごのござる棧敷と、ひとつにしても大事ないかや」と、白梅はしろとらしい顔して申せば、「それは我／＼卒忽なる事は仕りませぬ」と、  
(八文字自笑「野白内証鑑」4巻 1710〈宝永7〉)

c エ、主人たちから内衆までらしい人はない。常磐御前の仕合せとは武士の口から聞きに

くい。

(近松門左衛門「平家女護島」1719〈享保4〉)

「Xの感じがする／強い」ことが表されていると思われる。

先にも述べた通り、(19) acの上接部は、上接名詞の表す意味と「-らしい」の上接名詞としての意味が異なる。「じんぶつ」や「ひと」は、「-らしい」がつくとただの「人(人間)」ではなく、「素晴らしい、立派な人」を表す。(18)の「後悔」や「わけ」が状態を表しているのに対し、これらの上接名詞は特性を表していると考えられる。

(19) bは「素人らしい顔」であり、「顔=素人」のように同定することはできない。連体用法がある人物・物がなんであるかを推量するには、顔や声といった部分を修飾するのではなく、人物・物そのものの全体を修飾する必要があると考えられる。

### 【形容詞性接辞：意味の拡張】

1600年代の終わり頃には、生き物やものを上接名詞とし、これまでとは異なった意味を表す例が見られるようになる。以下の例を見られたい。

(20) a とつとぬけたる男聞て、目薬が吉岑に沢山にござるかといふ。一山の内にほどこにもござるといふ。をれもとりに行ませうといひしが、あくる晩にきたりて、けふよしみねへ行て尋たが、目薬らしい物なかつたといふ。どうしやつたといへば、木のねにあらうと思ひ、ほりかへしてみましたといふた。 (作者未詳「当世手打笑」1681〈延宝9〉)【再掲】

b 狼と山犬ハ似たやうな物で、しれぬ。へこれハしたり。お身ハそのめきゝをしらぬか。へイ、ヤ、しらぬ へしらずハ、おれがおしへてやらう。まづ狼らしいやつが出たら、棒をもつてぶつがゑい。山犬なればにげる。狼なれば、とびこんでくらみつ

(馬場雲壺「鹿子餅 後篇譚囊」1777〈安永9〉)

(21) しんまいの旦那へ、和尚、棚経に参られしが、取付世帯と見へて仏壇らしき物もなし。

(必々舎馬有「咄の会七席目時勢話綱目」1777〈安永9〉)

これらの例では、上接部が具体的な生き物・ものを表しており、(18)や(19)とは異なる。意味としては、「目薬に見えるもの」「狼に見えるもの」「仏壇に見えるもの」など、上接名詞そのものを中心として、「Xに見えるもの」を指し示しているのではないかと思われる。「YはXらしい」という同定は表さないが、1600年代の終わり頃になると、形容詞性接辞の「-らしい」において上接名詞Xがある属性として切り出されるものが見られるようになる。

### 【モダリティ用法】

1680年代の終わり頃以降、以下のような「YはXに見える」ことを表すモダリティ用法の「-らしい」の例が見られるようになる。同時期、既に上接名詞Xがある属性として切り出される例が存することは形容詞性接辞の例からも明らかであり、「-らしい」の意味の変化、ならびに比較的自由に上

接部を取ることによって見られるようになったものと思われる。

- (22) a 又年比三十計なる呉服屋の手代らしきが、さらしの衣唐木綿の香の図の紋つ<sup>マ</sup>ぶじたるが、かすかに見えすきておかし。(编者未詳「二休咄」1688〈貞享5〉)【再掲】
- b 中小性らしき侍、本町を通りけるに、町のなかはにてせきたのはなをふみきり、おりふし、かひ草履ももたせざれば、僕におゝせて、此あたりにそうりあきなふところやあると云つけける。(鹿野武左右衛門等「枝珊瑚珠」2巻 1690〈元禄3〉)
- c 大名の買物使らしき侍の、挟箱持一人めしつれ、中奉書入るよしにて、三百枚売りわたし、代銀請取り、その人帰られさまに、ひとつふたつ狂言しばゐの物語仕り申候が、財布を取残してゆかれし。(井原西鶴「万の文反古」3巻 1696〈元禄9〉)
- (23) a 表の戸を明け、手代らしい男が二人づれでずつとはひり、二瀬をまねき、「二階の声は、浦島と替名のおやち様ではないか」ととへば、(八文字自笑「野白内証鑑」5巻 1710〈宝永7〉)
- b 此やうなあばれ芸子を奴トいふ異名つけて称美すれはのりが来て腕まくり上ヶ浜芝居の物まね客の羽織とつて着ておくりがてらのぞめきたいこ持ちらしひものに行合ふて辻て新八よあほよと大声上てのゝしり皆興のさめたるおかしさ也(外山翁「浪花色八卦」1757〈宝暦7〉)

これらの「-らしい」では、「(新しく登場した人物に対し) XらしいY」という形で表しており、まだ何者であるかはっきりしない人物Yに対し、「YはXに見える」ことを示していると考えられる。「XらしいY」は、「Xらしい男・もの」というような形で現れ、上接名詞Xは人物の属性を示し、被修飾語Yは(ある)人物が示すという形のうえでの特徴を指摘できる。また、被修飾語Yは具体的な意味を持たず、表し得るのは男・女といった性別程度で、形式名詞のような働きをしていると考えられる。(22) aのように省略されることもある。

また、以下のような「(話者が) YはXに見える (と捉えている)」ことが示される例も見られる<sup>\*5</sup>。

- (24) a 向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらつてゐるから、コレ背中を、ながして下せへといつたら、ハイとこいて、六十ばかりのばゝアめが、たはしをもつて、きやアがつて、おせなかを、あらひませうかとぬかしやアがる(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編上 1806〈文化3〉)
- b 卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたといふがいひがかりで喧嘩よ。それから聞きねへ、其色男をノ聞きねへ、

\*5 岡部(2004)では、〈体言承接のラシイは、典型的な「推定」を表すというよりは、話し手が把握した状況を、話し手の印象に基づいて、「実情はわからないが～のように見える」と述べること(〈様態)を表すこと)を中心的な機能とする。〉と指摘されている。近世中期にも、こういった用法は既に存するのではないと思われる。

むごくぶちのめすもんだから、きまねへ」アバ「イ、サ聞いてるヨ」

(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之巻 1820〈文政3〉)

(24) は、形や意味・用法については(23)に同様といえる。しかし、「XらしいY」が話者によって述べられたものであることから、話者がYの持つ特徴からXと見たことが示されており、(23)に比べてより主観的な判断になっているのではないかと思われる。

また、推量を表す連体用法の「-らしい」が見られるようになった後に、上接名詞が「事柄」や、「事柄に対する話者の態度」を表す例も見られる。

(25) 金十郎「明日の朝は茶漬けを食いの、ずい帰りだぜへ。今夜はお、かた、菊園か菊の井といふ名代らしい晩だ」喜八「悪推ばかりおつせんす。行灯に無駄書き、もう帰るも古いやつね」  
(奈蒔野馬乎人「啞多雁取帳」1783〈天明3〉)

(26) 財布持ち「昔は代物を貸した上に、代をば、やつぱり貸した方から取りに回つたそうだが、ほんの事か知りませぬ。どうやら嘘らしい事だぞ」

(万象亭竹杖為軽「従夫以来記」1784〈天明4〉)

(25) は、「XらしいY」で未実現の事柄が表されている。即ち、話者が発話時において「[今夜は、菊園とか菊の井とかいう名代が来る]らしい」と捉えていると考えられる。(26) は、他者から聞いた話について、話者が「昔は代物を貸した上に、代もやはり貸した方から取りに回ったという話は、嘘らしい」と捉えていることが示されているのではないかと考えられる。また、以上の例はは、副詞「おおかた」や「どうやら」と共起している点にも注意される。4節にも述べた通り、「-らしい」はモダリティ用法において「どうも／どうやら」などの副詞と共起するとされるが、これらのように推量的判断を表す連体用法でも共起が可能なのである。

(22) から(26)に挙げた例は、「Xに見える」や「Xと捉えられる」ということが表されており、(話者の)主観を表す用法になっていると思われる。(話者の)主観を表す点で、モダリティ化していると考えられる。

## 5-2. 推量を表す連体形「-らしい」と「-らしき」

以上の通り、遅くとも1680年代には、推量を表す連体用法が見られる。ここでは、連体形「-らしい」のモダリティ用法について、文体差や修飾・被修飾語の関係性といった観点から考察する。また、近世に続いて近現代の例についても確認しておきたい。

まず、この用法では現代語においても「-らしい」「-らしき」の両形が見られる。近世・近現代の「-らしき」の使用には、言うまでもなく、文語と口語という文体の差が関係する。次の例を見られたい。

(27) a 金手ぬぐいをあげふか 谷ウ、貸しなせへ。俺がのは汗手ぬぐひで、役にたゝねへ

三人とも足をあらひあがる内に、釜だいなと用意して、三人が背へ直し置、となりの女房らしきをよびよせ、みへ口をあて、何やらさやく

(田舎老人多田爺「遊子方言」1770〈明和7〉)

- b おさみ「ヲヤ、お鯛さん。お早うございますネ。夕は暎<sup>ゆふべ</sup>おやかま<sup>さそ</sup>しう料理屋の娘<sup>りしきもの</sup> おたい「アイ、ゆふべはおねむかつたらうネ。いつでもあの生酔<sup>なまゑひ</sup>（なまゑひ）生酔<sup>なまゑひ</sup>さんは夜<sup>よ</sup>がふけるねへさみ「アイサ、それでも癖<sup>くせ</sup>がなくて能上戸<sup>いしやうご</sup>さ。粕兵衛さんのやうにでないから能<sup>えい</sup>よ。

（式亭三馬『浮世風呂』2編上 1810〈文化7〉）

- c <sup>といふところへ、廿四五のよめらしき女、七十あまりのめくらばあさま、船と見えて、法体したる人の手をひき、さくろ口まき付そひいづる。もつとも、手をあてて、はらくするてい</sup> よめ「おあぶなう<sup>しづか</sup>ございますヨ。静<sup>あすば</sup>に遊<sup>あすば</sup>まし しょうとめ「アイ／＼ トとめをけのわきへする

（式亭三馬『浮世風呂』2編下 1810〈文化7〉）

- (28) 向ふのながしに、かの年増<sup>らしい</sup>やつが、なにかあらつてゐるから、コレ背中を、ながして下せへといつたら、（十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編上 1806〈文化3〉）【再掲】

(27) は地の文における例、(28) は会話文における例である。地の文では「-らしき」、会話文では「-らしい」が用いられる。勿論、これは推量を表す連体用法に限った差異ではない。以下、形容詞性接辞の例も挙げておく。

- (29) 通り者こりや死人を焼く匂だ。じやが、土手でかげば、死びとの匂も、良いものじやないか。

今夜は大ぶ土手が永やうだ <sup>といふで、しやんと小づまを鼻かぶとと、上るりを、巧者らしき声にてかたる</sup>

（田舎老人多田翁「遊子方言」1770〈明和7〉）

- (30) 風呂敷包を脊負し小僧、摺違ひしが立止り、過行唄女の後影情<sup>すきゆく</sup>と見送りしが、後を慕ひて唄女の帰り宅まで見とゞけ、立かへる發明<sup>ら</sup>しき小僧<sup>あるまひ</sup>の動靜、何ゆゑなるか知らねども、<sup>ひとりうなづき</sup>独合点はしりゆく。（為永春水「春告鳥」3編 1811〈天保8〉）

- (31) りき「アノウ御家の小僧さんが参りました 鳥「ハテナ誰だか りき「アノお前さんが御ひるきになさつた發明<sup>ら</sup>しい小僧さんでございますヨ。

（為永春水「春告鳥」4編 1811〈天保8〉）

(30) と (31) のように、同じ筆者であっても、地の文では「-らしき」が用いられ、会話文では「-らしい」が用いられるのである。

明治期以降も、連体形「-らしい」「-らしき」には、推量を表す用法の例が見られる。新しい登場人物や物を示す際に現れやすく、また、「-らしき」が主に文語文において見られる<sup>\*6</sup>という特徴も近世に同様である。

- (32) a <sup>おや ちやうすけは、</sup>親は長助母はおさめと名ばかり知つて土地は知りませんと聞に下女を供に連れたる此の<sup>な</sup>町家の女房<sup>ら</sup>しき人は驚きて、<sup>ひと おどろ</sup>委しい話<sup>くは</sup>も聞き共<sup>はなし き</sup>に親御<sup>とも</sup>を探して上げたい私<sup>おやご</sup>と一途<sup>さが</sup>にマア<sup>あ</sup>ござれと、<sup>わし いつしよ</sup>

（饗庭篁村「従軍人夫」1895〈明治28〉）

- b 又候角灣の北北東に當り高地に砲臺<sup>ら</sup>しきものありと （「海内彙報」1895〈明治28〉）

\*6 『太陽コーパス』の口語・文語の分類による。(33) は何れも文語資料である。(34) a b c は口語資料、(34) dのみ文語資料であるが、(34) dの用例箇所は会話文であり、口語的と考えられる。

(33) a 馬を前の柳の蔭に繋いで、百姓らしい朴訥の男が床几に掛けて濃茶を啜つて居た。

(川上眉山「眼前の春光」1901〈明治34〉)

b 人の氣勢がしたので、只見ると、三十恰好の、達者作りの女房らしいのが、姉様冠、跣に襷掛、大きな笊に初壳を山盛にしたのを抱へ込んで畠の方へ出て行つた。

(川上眉山「眼前の春光」1901〈明治34〉)

c 出て来たのは日頃の生意氣な書生では無くて、仲働らしい中年増であつたが、彼も倅しく輕侮の色は見せながらも、兎も角も取次をして、廳で令息の部屋へ案内をした。

(小栗風葉「一腹一生(承前)」1901〈明治34〉)

(32) (33) のような連体形の例について検討すると、「XらしいY」は、「XであるY」のように同格で置き換えられる例と、「XのY」のように所属で置き換えられる例に分かれるのではないと思われる。(32) や (33) b のような、「Xらしい人(男・女)・もの・の」といった、名詞が準体詞の働きをする場合は、同格に置き換え易い。一方、(33) ac のような、被修飾語に当たる人物に既に情報が付加されている場合は、上接名詞はその人物に対する一特徴と捉えられ、所属と考えたほうがよいように思われる。

また、以下のような例は同格・所属といった解釈が当てはまらないものと思われる。

(34) 長者は買僧に魅されたり今や早して雨らしい雲もなし石の獅子の眼から血が流るゝより此方等の臍の茶が沸溢るゝわ一番嚇してやるべし

(饗庭篁村「暗合か饗案か」1901〈明治34〉)

上接名詞Xは被修飾語Yに対し、推量し得る事柄になっている。(34) d を例とすると、「雨が降るらしい雲」と解釈されるものである。

なお、明治期以降では、「-らしい」が活用語の言い切りを承けることが定着する。そのなかで、連体形を取るものも見られる。

(35) a 野村は有繫に煩悶して居るらしい様子であるが「あんな腐つた女は去つても惜しくない！」と、キツパリ言つた。

(柳川春葉「誇」1909〈明治42〉)

b 菊見に行くらしい車が、大分続いて藍染橋の方から来る。

(森鷗外「青年」1910-1911〈明治43-44〉)

(36) a 中には待ち設けたりと覺しき男の三十四五なるが既四五杯は傾けたるらしき顔色して、

(幸田露伴「緑の糸」1901〈明治34〉)

b さても一行の人々を見れば生れて以來遠慮といふは夢にも見ぬらしき怪男子、而も房州の有志者より招待を受けたる操觚者なりけり。(長谷川天溪「房州の海岸」1901〈明治34〉)

以上のような、活用語の言い切りを承ける例についても、被修飾語Yがどういったものであるかが上接部Xによって表されており、「YはXと見える」「YはXと捉えられる」ことが示されているのではないかと考えられる。



このような、活用語の言い切りを承ける連体形「-らしい」「-らしき」については、用例の割合に差がある。「-らしき」は活用語の言い切りを承げにくく、「-らしい」にはそういったことはない。今回採取した用例では、連体形「-らしい」が活用語の言い切りを承げる例は、明治期23例、大正期69例、昭和期153例、平成32例であるのに対し、「-らしき」は明治期7例、大正期3例、昭和期0、平成3例である。これは、「-らしき」が同格を表すことに関連するのではないかと思われる。

以上の通り、推量を表す連体用法の「-らしい」と「-らしき」は、ほぼ同じ意味・用法を有しているが、XとYの関係は「-らしき」のみ同格に偏り、「-らしい」ではそういった偏りが無い。また、「-らしい」は活用語の言い切りを承げる割合が高く、「-らしき」で低いといった点で異なる。

## 6. 「-らしい」のモダリティ用法

以上の通り、「-らしい」の連体用法を中心に、意味・用法を見てきた。これによると、「-らしい」のモダリティ用法は、まず、以下のような連体用法がきっかけとなって見られるようになるのではないかと考えられる。

- (37) a 是にかぎらず扇屋は、女房に骨ををらせて亭主はらくしてまうける、要は折手共が働き。  
借座敷かしざしきの台所にあがりて、まづきせるの湯に成るほどたばこけふらせ、賄らしき男とらへて、芝居のぬれ狂言のうまさ所を咄しかけ、其のあはひには椀などふいて、まづ売る扇子の事はすておき、下々のふくろび、きやはんのひものはなれたをぬひつけ、さのみしんどうになき、目にたつはたらきをしておき、

(八文字自笑「野白内証鑑」3巻 1710〈宝永7〉)

- b 卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたといふがいひがかりで喧嘩よ。

(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之巻 1820〈文政3〉)【再掲】

こういった例では、「XらしいY」で「YはXに見える」ことを表し、特に(37) bのような話者の視点が入ることによって、「X=Y」であるという推量的判断を表すと考えられる。このような連体用法におけるモダリティの例が見られるようになった後、終止用法でもモダリティを表すようになる。たとえば、以下のような例である。

- (38) 「サアもふよかアかへ飯らふの 長「ア、かへるがネ。今のはどふも米八さんらしいヨ。かくさずといゝじやアありませんかト

(為永春水『春色梅児誉美』初編3 1833〈天保4〉)【再掲】

ここでは、話者が知覚によって把握した状況から、「AはXである」と判断していることが表されている。「A=X」は真偽不明であり、「-らしい」によって話者が真であると判断していることが示されていると考えられる。

## 7. おわりに

以上の通り、「-らしい」の連体用法について見てきた。結論は以下の通りである。

「-らしい」は、中世から近世の半ばにかけて、いずれの活用形でも形容詞の例のみが見られる。しかし、1680年代の終わり頃になると、連体用法において、上接部Xと被修飾語Yが「X=Y」と同定し得る関係の例が見られるようになる。その際、「中小姓らしき侍」のように、「-らしき」の形が見られることも特徴の一つである。こういった連体形「-らしい」は、新たに登場した人物や物（Y）に対し、それがXとYが同定関係であることを断定せずに示している。これは、「YはXと見える」「YはXと捉えられる」と解される点で、推量的判断（モダリティ）を表していると考えられる。その後、1800年代に「(さっき見えたのは) どうも米八さんらしい」のような、終止形で推量を表す例が見られることとなる。ここに至って、「-らしい」は助動詞化したのではないかと考えられる。

連体用法から意味・用法が変化したのは、もともと「-らしい」が何かを修飾する形容詞として用いられ、形容詞性接辞の段階から連体用法の例が多く見られることによるのではないかと思われる。そのなかで上接名詞を切り出すものが見られ、「Xの感じがする／強いY（仁物らしい男）」「Xのように見えるもの（目薬らしいもの）」のように連体形の例から意味が変化していくのではないかと考えられる。

このような、元は接辞であったものが、モダリティとして用いられるようになる例に「-ばい」が挙げられる（例…形容詞性接辞：子供っばい靴 モダリティ：雨が降るっばい）。「-ばい」に関して、連体形においてモダリティ用法のものと考え得る例が見られ、その後、終止用法におけるモダリティの例が見られるようになる。接辞がモダリティ用法を獲得するうえでの興味深い共通点なのではないかと思われる。

### 【参考文献】

- 岡部 嘉幸 (2004) 「近世江戸語におけるラシイについて」『近代語研究』第12集 武蔵野書院
- 亀井 裕子 (2003) 「近世上方語における接尾語「ラシイ」について」『國學院大學 大学院紀要』35
- 小島 聡子 (1996) 「「らしい」について」『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院
- 鈴木 英明 (1988) 「明治期以降のラシイの変貌」『国語国文』57-3
- 田野村忠温 (1991) 「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6 第11部複文』くろしお出版 pp.61-62
- 原口 裕 (1971) 「活用語に接続する「らしい」—明治期におけるその定着の状態—」『語文研究』31・32
- 三宅 知宏 (2006) 「「実証的判断」が表される諸形式 —ヨウダ・ラシイをめぐる—」『日本語文法の新地平2』益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編 くろしお出版
- 前田 桂子 (1995) 「近世文芸作品におけるラシイについて」『筑紫語学研究』6

- 村上 昭子 (1981) 「接尾辞ラシイの成立」『国語学』124
- 山本佐和子 (2010) 「モダリティ形式「ラシイ」の成立」「日本語における名詞節の脱範疇化」第35回  
 関西言語学会 ワークショップ 6月26日 於京都外国語大学 (口頭発表)
- 湯沢幸吉郎 (1954) 『江戸言葉の研究』明治書院 pp.296-298、pp.512-513
- 湯沢幸吉郎 (1962) 『徳川時代言語の研究』風間書房 pp.440-441

## 【用例出典】

### ■辞典

『時代別国語大辞典 室町時代編』室町時代語辞典編修委員会編 三省堂 1991年

### ■文学作品

『抄物資料集成』第一巻 史記抄 清文堂 1971年 / 『噺本大系』第2巻 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1975年 (「醒睡笑」所収) / 『噺本大系』第4巻 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1975年 (「二休咄」所収) / 『噺本大系』第5巻 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1975年 (「当世手打笑」所収) / 『噺本大系』第6巻 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1975年 (「枝珊瑚珠」所収) / 『噺本大系』第9巻 武藤禎夫編 東京堂出版 1976年 (「口拍子」所収) / 『噺本大系』第11巻 武藤禎夫編 東京堂出版 1979年 (「鹿子餅 後篇譚囊」「咄の会七席目時勢話綱目」所収) / 『噺本大系』第12巻 武藤禎夫編 東京堂出版 1979年 (「振鷺亭噺日記」所収) / 『上方歌舞伎集』新日本古典文学大系95 土田衛・河合眞澄校注 岩波書店 1998年 (「けいせい朝間嶽」「伊賀越乗掛合羽 七ツ目」所収) / 『江戸歌舞伎集 新日本古典文学大系96』古井戸秀夫・鳥越文蔵・和田修校注 岩波書店 1997年 (「御撰勸進帳 第一番目三建目」所収) / 『洒落本大成』1巻 洒落本大成編集委員会 中央公論社 1978年 (「儉空齋主人」所収) / 『洒落本大成』2巻 洒落本大成編集委員会 中央公論社 1978年 (「新月花余情」「浪花色八卦」所収) / 『浮世草子集』新編日本古典文学全集65 長谷川強校注・訳 小学館 2000年 (「野白内証鑑」「好色敗毒」所収) / 『井原西鶴③』新編日本古典文学全集68 谷脇理史・神保五彌校注・訳 小学館 1996年 (「世間胸算用」「万の文反古」「日本永代蔵」所収) / 『近松門左衛門集①』新編日本古典文学全集74 鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之校注・訳 小学館 1997年 (「淀鯉出世滝徳」「薩摩歌」「平家女護島」「女殺油地獄」「夕霧阿波鳴渡」所収) / 『近松門左衛門集③』新編日本古典文学全集76 鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之校注・訳 小学館 2000年 (「出世景清」所収) / 『洒落本 滑稽本 人情本』新編日本古典文学全集80 中野三敏・神保五彌・前田愛校注・訳 小学館 2000年 (「啞多雁取帳」「従夫以来記」「遊子方言」「春告鳥」所収) / 『東海道中膝栗毛』新編日本古典文学全集81 中村幸彦校注 小学館 1995年 / 『浮世風呂』日本古典文学大系63 中村通夫校注 岩波書店 1957年 / 『春色梅児誉美』日本古典文学大系64 中村幸彦校注 岩波書店 1962年 (「春色辰巳園」所収) / 『花暦八笑人 滑稽和合人

妙竹林話七偏人』三浦理編 有朋堂書店 1915年 / 『近松全集』第一巻 岩波書店 1985年 (「主馬判官盛久」所収)

■データベース

『太陽コーパス』雑誌『太陽』日本語データベース 国立国語研究所編 博文館新社 2005年

(「従軍人夫」「海内彙報」「眼前の春光」「一腹一生(承前)」「暗合か鬩案か」「誇」「縁の糸」「房州の海岸」所収) / 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社 1995年 (「孤高の人」所収) / 『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』新潮社 1997年 (「青年」所収)

■小説

『OUT』桐野夏生 講談社 1997年 / 『さまよう刃』東野圭吾 角川書店 2008年 (用例は文庫版: 2008年より採取) / 『八日目の蟬』角田光代 中央公論社 2007年 (用例は文庫版: 2011年より採取)

[付記] 本稿は、第237回 筑紫日本語研究会(2011.8.8~2011.8.10)にて行った口頭発表に基づくものである。席上、貴重な御意見を賜った。感謝申し上げる。